

第 1943 回定例研究会報告要旨（12月1日）

農業の持続的発展のための日中間の 技術面の差異について

農業廃棄物の処理、有機農法及び
農業標準化に関する若干の問題

（中国農業科学院）張 孝安

1. 日本の有機農業の現地調査結果および その感想

2003年11月12日から15日にかけて、先進的な有機農業を実践している岡山県高梁地区上組営農実行組合および高知県土佐嶺北JA園芸部の現地調査を行った。

上組営農実行組合では、有機JAS規格を満たした上で、さらに厳格な岡山有機無農薬農産物生産基準を満たした農業生産が行われている。農産物の付加価値も高く、ビニールハウス1棟当たり70万円の純収益を上げる高収益農業を実現している。ただ、「岡山有機無農薬農産物」の証票を表示するための要件が厳しいため、新規就農の際には技術面等での支援が必要であると思う。

土佐嶺北JA園芸部では、各農家が環境ISOの認証を取得することを通じて環境保全型農業の実施に取り組んでいる。また、2000年に竣工した土佐堆肥センターは発酵処理期間が25日と効率的で、地域の畜産再編の核となるとともに、製造された堆肥は嶺北全地域の園芸や水稻での利用が拡大している。今後は嶺北ブランドの確立と新しい流通ルートを開くことが課題であろう。

2. 中国の農業廃棄物の処理

中国の農業廃棄物のうち主なものは農作物の茎、家畜の糞便、廃棄された農業用シートなどである。

農作物の茎は伝統的に家畜の飼料、藁葺屋根の材料、肥料、燃料等に用いられてきたが、技術の進歩や生活様式の変化によって茎の利用方法がなくなり、多くの地域で茎の野外焼却が行われている。このため、茎が新たな環

境汚染を引き起すようになっているが、新しい茎の利用方法はまだ開発されていない。

また、現代的な大規模飼育施設の増加、農業用ビニールシートの普及とともに、家畜糞尿や廃ビニールシートが環境汚染の大きな要因となっている。

こうした中で、メタンガス技術が、生態農業を進める上での中核的な役割を果たすものとして注目されている。メタンガス技術は“豚舎 メタンガス池 果菜農園”といった循環型農園の紐帯であり、このような生態農園の開発は農村生活環境を改善するとともに、農民の収入を増加させるものとして期待されている。

3. 合鴨稲作技術の普及

合鴨稲作技術は日本から中国に伝わったものであるが、中国で本格的な導入の動きが始まったのは、2000年頃のことである。江蘇省ではこのために10カ所の普及センターが設立され、導入面積は20,000ha以上に達する見込みである。合鴨稲作技術は揚子江周辺地域に最も適当な技術として考えられるようになり、浙江省、湖南省、湖北省等でも大規模かつ積極的な拡大が見られる。

出荷した合鴨稲作米および鴨の肉は消費者の反応も良好である。

4. 農業標準化

農産物の安全や品質の向上とともに農業生産の発展を図る上で、中国では農業標準化および農産品標準化が重要な課題となっている。このため、農業部では「緑色食品規定」（農業部標準システム）を定めて実施しているが、農産品についての国家による統一された認定標準はまだ定められてはいない。

農業標準化の適切な実施のためには、国民全体の認識水準が不十分、応用技術面での遅れ、地域による差異、認定機関の未統一といった課題を克服することが必要とされる。

（文責 河原昌一郎）